R.F.C.M Heartful Report

リスク・ファイナンシャル・カウンセリング・マネジメントのハートフル．レポート===２０１３年１０月号

会計事務所にだって出来ないことがある

リスクのクスリ

◆税務のプロフェッショナルの税理士は…

税理士は必修科目の簿記論、財務諸表論と、選択必修科目の法人税、所得税、選択科目として相続税法、消費税法又は酒税法、国税徴収法、事業税又は住民税、固定資産税などの試験に挑み難関を突破して合格した人で、法の下に中立・公正な立場で、私たちに代わって税務業務の処理や調整、指導をしてくれる専門家です。

特に、一般人であれば確定申告の時、法人であれば毎年、年度末に提出する「決算申告書」の作成などの、申告に必要な膨大な資料の整理と毎月々の経営指標に欠かすことの出来ない「月次試算表」の作成など、正しく処理が出来ているかどうかを指導してくれる経営者の重要なパートナーであり、経営者との信頼関係が成立していなければなりません。

然しながら、最近目に付くのが「顧問料」の廉価を全面的な売りにして顧客開拓をしている事例が見受けられるようになりましたが、リスク・カウンセラーの視点から判断すると危険な現象であると感じます。

その一方では、「税理士は申告書づくりをしてくれる人」としか理解していない経営者がいたり、顧問料に見合うだけの業務をしていない会計事務所があったり、社長に気に入られるような甘言ばかりで、問題点を指摘しなかったり、顧問先に訪問するのも税理士試験を勉強中の職員に任せきりであったり、事業経営者と税理士とが十分なコミュニケーションが出来ているとは思えないような事例も多く感じられ、経営危機に陥ってから慌てて対処しているようでは双方にとって不幸なできごとで誠に残念なことです。

前述のように、税法は国家の財源を担う重要な法律であり、その時々の時代背景の変化と共に改正される税法に携わる専門家は、改正税法や税務通達の解釈などで日々努力を重ねているだろう事は想像できますが、「税の専門家」であるので、財務諸表から見えてくる経営上の良い点と問題点と改善点は的確に支持が得られることでしょう。

但し、あくまでも係数上の観点であることと、経営者が間違っても誤ってはいけないことは、多くの税理士は経営者ではないことです。

◆経営者には会計処理は業務の一部

会計処理のための伝票入力処理のための別会社の社長であったりする場合もありますが、決まり切った業務処理をする会社であり、厳しい経済環境の中で丁々発止の業務に取り組んでいる経営者の実情が、どこまでくみ取れるものか、深くコミュニケーションを取っておく必要性はココにあります。

自分の専門分野を明確にして、不得意の分野の税法については先生のネットワークの中の、その問題の税法に長けた税理士との連携により速やかに解決してくれる先生と顧問契約をしたいものです。

顧問税理士がしてくれないのであれば、経営者は自ら『セカンドオピニオン』としての税理士との契約をしておくことも、時には必要なことではないでしょうか。

会社経営において、財務会計は事業を推し進める上で重要不可欠なことは当然なのですが、会計処理だけが大切なのではありません。

優秀な経営者は、ほぼ１００パーセント、税理士を「経営コンサルタント」として活用していますが、それは、税理士が広い人財ネットワークを大切にしていて、経営者の問題解決において常に情報ネットワークの構築をして、顧問先の経営状況が悪化すると、その経営者を扱き下ろして責任回避をするようなことでは、その税理士とは顧問契約をするに値しないものとして、早々に決別するということも一つの選択しかも知れません。

◆上から目線や機嫌取りの税理士はダメ

顧問税理士が経営者に対して押さえつける言動を感じたとき、「何か不都合なことがあるの･･･？」と、素朴な疑問を持つこともあるかも知れません。疑心暗鬼の気持ちでモヤモヤしていないで、納得いくまで話し合うことも、時には必要かも知れません。

時代に合わせた事業転換に迷ったり、過大な債務超過で苦しむ経営者の背中を押せるのも税理士の役割ですが、顧問先を減らしたくないという思いが先行して社長の機嫌を取り、言いなりになっている税理士との顧問契約も危険です。

社長も専門家、税理士も専門家、専門家としての自負を持って意見を戦わせるなんて素晴らしいことではないでしょうか。

ちょっと歳時記

近くの動物公園に３０cmほどに成長した瓢箪（ヒョウタン）が実っていた。驚いたことに瓢箪は原産地のアフリカで食用、加工品の材料として栽培されていた世界最古のウリ科の植物とか…。日本書紀にも神事や容器として使われた記述があるというから驚く。

秀吉の“馬印”と使われた千成瓢箪。大きな瓢箪は、水筒や柄杓などの道具として漆をかけたりして加工されており、その歴史も古いようです。

瓢箪の蔓を切った部分に割れないように慎重に深めに孔を開け、水を張った大きなタライに沈ませ、孔から水を染み込ませ４～５日して中身が腐ったら、細い棒を差し込んで腐った中身を掻き出し、逆さに吊して乾燥したら完成です。

相続は他人事ではありません②

ファイナンシャルプランナー　山口晶子

相続は配偶者や血族関係者がいれば誰にでも発生するものですが、そのイメージから「うちには関係ない」と思われている方が多いと感じています。実際にはどのような対策をすれば良いのかを数回に分けてお伝えしています。

【エンディングノートの活用】

「終活」という言葉を耳にしたことがあるでしょうか？終活とは、ご自身の人生の様々な事柄を見つめ直し、より充実した残りの人生を過ごすと共に、事前に準備を行い理想的な人生の終焉であろうとする活動です。昨今、度々マスコミ等でも取り上げられ、関連する催しも各地で行われています。

ところで相続は、その対策をいざ始めようと思っても具体的に何をすれば良いか戸惑ってしまい、家族に対する想いも交錯し、何も出来ぬままに年月が過ぎ足踏みしてしまう方も多い様です。

それならば、「終活」を相続について考えるきっかけにしてみてはいかがでしょうか？私は終活の初めの一歩として「エンディングノート」の作成をお勧めしています。

エンディングノートはページをめくってみると、出生時の場所や体重、名前の由来に始まり、かつてのあだ名や幼少期、学生時代、社会人時代の思い出、その当時に夢中だったこと等々これまで歩んできた人生の振り返りがあり、また家系図なども記載できるようになっていて、重みある人生の「素晴らしい体験」や「想い」を大切な人に伝えるメッセージでもあると気付きます。

実際に書いてみると昔のことを思い出して楽しいものです。写真などを載せたり、自分なりの工夫をしつつ過去を紡いでいけば小さな自分史が出来上がります。エンディングノートは２，３時間で出来上がるようなものではなく、作成には時間がかかるものです。その種類も多数ありますので、最初は軽いものから初めて何回書き直しても良いのです。

【遺言は厳格な法律行為】

人生の長い歩みの中で積み上げた財産を、大切な家族にどう遺すのかを明確にするために遺言を活用する方法があります。

エンディングノートは遺言書ではありません。その内容によっては必要に応じ、法的効力のある遺言を残すという選択もあるでしょう。

民法では相続できる人を法定相続人とし、その割合、順位が決められていますが、遺言はその人の意志を尊重するという制度ですから、法定相続分より優先してその効力を発揮できるのです。

遺言にも種類がありますが、一番確実で安心できるのは「公正証書遺言」です。これは遺言者が話した内容を公証人が筆記し、公証役場でその内容が保管されますので、紛失や改ざんの心配がないのです。

手紙のように自分で書く遺言は「自筆証書遺言」と言いますが、遺言として認められるには全文、日付、氏名を自分で書いてあるもの、また押印があるもの以外は認められません。パソコンで書いてあるもの、日付や押印がないものは法的効力が無いため、後々揉め事の原因になる事も考えられます。

【大切なことは想いを残すこと】

日々承るご相談の中で「相続が心配なのだが実際に親とはこうした話をしづらいので、相続について情報として知っておきたい」という方が少なくありません。その心情は理解できるところですが、お父様、お母様の想いを汲まずして情報を得ただけでは解決には至らないでしょう。

相続で一番大切なことは「想いを残す」ことではないでしょうか。この部分が伝わっていれば、後世の人も迷うことはありませんし、こうした経験から後に迎える自身の相続の場でも役立てることができ、脈々とその「想い」は繋がっていくのではないかと私は考えています。

【山口　晶子さん・プロフィール】
横浜市在住。株式会社ＲＫコンサルティング所属。日本ＦＰ協会会員（ＡＦＰ）。
２０１３年度ＭＤＲＴ成績資格会員
神奈川県ファイナンシャルプランナーズ協同組合正会員
ライフプラン、保険、年金相談の他、セミナーでの講師も務める。

気になる数字……２０．１４％
内閣府･国勢調査による男性の生涯未婚率

「少子化社会対策白書」が先日内閣府より発表されました。

白書では、１９８０年からの３０年間で「生涯未婚率」（人口学で５０歳の時点でまだ結婚したことがない人の比率）が、男性で約７．７倍、女性で約２．４倍と大幅に増加していました。

２０１０年の「生涯未婚率」は男２０．１４％、女１０．６１％ですが、現在２５歳の若者が５０歳になる約**２５年後においては、男３５．４％、女２７％**になることが予測されている。

少子化社会の根源となっているのは、大手企業による「雇用安定」であり、非正規雇用の現在の体制から正規社員を増やすことへと移行することによって、少子化問題の解決が可能になるとも言われています。

左記に示す女性の生涯未婚率の「１０％＝東京都の人口」であり、男性の「２０％＝神奈川県＋千葉県＋埼玉県＋αの人口に相当することになる。つまり東京圏の人口数が「生涯未婚」であるのですから驚きます。

２５年後の男性＝約３５％、女性＝２７％の予測値が現実となった時、「終活」の観点から捉えてもライフスタイルの変化に対応したプランニングが必要となる。

夫婦別性、婚外子の権利、その中で「結婚しないライフスタイル」を確立してゆく女性の増加、女性の「晩婚化」による出成率の低下や、男性高齢者の「おひとりさま」生活者の行く末を社会問題として取り組むべき時と考えられます。

賃借人の「善良なる管理者の注意義務」

不動産コーディネーター　豊 田 泰 由

２０２０年に東京オリンピックが開催されることが決まり、建築ラッシュに湧く（？）かも知れない東京都ですが、首都直下型地震への不安が叫ばれる中、東京都の弱点でもある「木密地域の改善」は、徐々に進められていましたが、その問題を解決するための「**木密地域不燃化１０年プロジェクト**」が進められています。

東京都では、市街地の不燃化推進制度（不燃化特区）の創設をするなど、その具体的な取組となる実施方針が決まり、「木密地域」を燃え広がらない、そして燃えない街へと進められています。

制度の中身は、「不燃化特区」が創設され、防災都市づくり推進の計画にあげられている「整備地域」のうち、地域危険度が高いなど東京都が「不燃化特区」に指定し、

◆延焼遮断帯を形成する主要都市計画道路整備の加速
◆整備地域の主生活再建等のための特別の支援など

詳細情報は東京都から広報されています。

プロジェクトの目標は‥‥

・高度な防災都市を実現し東京の安全性を世界に示す
・震災対策に集中的に取り組み、地震に負けない都市を造る

として、東京都内の「**木密地域不燃化**」の対象となる地域に対しての、都市計画の見直しと事業化が進めれれているので、地域の構想や補助金などについては、東京都または該当地域を持つ各区に問い合わせてみてはいかがでしょう。

■認知症予防･新書■　№５２

ＮＰＯ法人 認知症介入指導協会 理事 清輔喜美男=
http://www.ninchisho-yobo.jp

～栄養の宝庫「魚食」のススメ～

英インペリアル・カレッジ・ロンドン脳栄養研究所マイケル・クロフォード所長他ー

マイケル・クロフォード所長は「日本人は魚を中心とした日本食の良さをもっと認識し、積極的に食べるべきだ」と強調している。◆魚の脂肪（魚油）に豊富に含まれるドコサヘキサエン酸（DHA）が脳の働きと密接な関係を持つことをいち早く示した研究者で、日本人の魚離れを危惧している。◆厚労省の２０１１年の国民健康・栄養調査では、１０年前に比べて魚介類の摂取量は1日平均で１０２gから７８gに減少。世代別で最も多く食べている６０～６９歳でも１２３gから９７gに減ったとしている。◆DHAやエイコサペンタエン酸（ＥＰＡ）は海草などを食べた魚類が体内で作り蓄積する。人体では合成されない必須脂肪酸だ。このため厚労省はDHAとＥＰＡの合計で、１日あたり1g以上の摂取を推奨している。◆ＥＰＡは１９７０年代から動脈硬化や心筋梗塞の予防効果について注目が集まり、研究が盛んになった。その後、DHAが脳に多く蓄積することがわかり、認知・学習機能との関連を探る研究が、国内外で盛んになった。◆女子栄養大学の鈴木平光教授らは千葉県茂原市の特別養護老人ホームの高齢者３０人（平均年齢７８歳）を対象に、DHA入り魚油カプセルを０．６４～０．８gずつ半年間、毎日飲んでもらい、認知機能のスコアの変化を調べた。すると6割にあたる１８人で数値が改善した。認知症２２人のうちの１２人と、健常者８人中６人で改善がみられたという。◆鈴木教授によると、１日のうち魚料理を1回食べれば、DHAを約０．７gとれ、ＥＰＡと合わせると約1g摂取できる。効率よく摂取するには、脂の乗った旬の魚を食べると良い。「調理法にこだわらず、メニューを豊富にして毎日食べることが大事だ」という。リノール酸を含む植物油をとりすぎると、DHAやＥＰＡの機能が妨げられることも頭に入れておこう。（日本経済新聞 ２０１３年9月８日朝刊より抜粋）

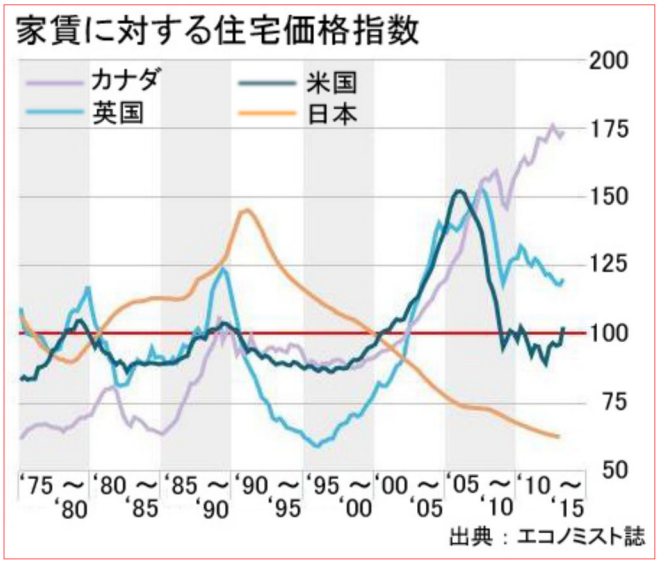
World Now
日本でも、そろそろ上向く住宅価格？

２０２０年のオリンピックは、東京で開催されることに決定しました。久々に飛び込んできた明るいニュースだけに、様々な方面で期待も膨らんでいるようです。

１９６４年の東京オリンピック開催前も建設ラッシュを中心とする好景気に沸いただけに、期待する気持ちは理解できます。

こういう期待感が株式や住宅の価格に与える影響は小さくないので、今月は、住宅価格に関する数字をご紹介したいと思います。

グラフの縦軸になっているのは、家賃と比較したときの住宅価格の長期的な平均を１００としてあらわした相対値です。



カナダは、小さな波はあるものの価格上昇が続いています。米国は、サブプライムローン問題発覚前の住宅バブル期に、家賃に比べ住宅価格が相当割高になっていたことがわかります。もちろん問題発覚後は、値を下げています。英国は、直接サブプライムローン問題を抱えていたわけではありませんが、米国の影響を受け、住宅ローンが組み辛い状況下で買い控える傾向がうまれ、供給過多状態になっていたと言われています。

そんななか、バブルが崩壊したあと値を下げ続けている日本は、いつ上向くのだろうと思っています。家賃に比べ割安感が出てきているというだけでなく、デフレ環境にある日本では、価格そのものも下落傾向が続き、年収に対する価格比も同じく下落傾向にあります。

切り口を変えて、国を変えて、さまざまなグラフを作成できるWebサイトですので、ご興味のある方は、ぜひお試しください(http://www.economist.com/blogs/dailychart/2011/11/global-house-prices)。

東京を中心として、春頃から新築マンション価格が上昇傾向に入ったと言われています。いよいよ全国を対象とする統計的データにおいても、価格下落が上昇に転じるのか、気になっています。

リスク・カウンセラー奮闘記・113

● “終活”における「死生観」とは死の覚悟か！

群馬在住の人生の先輩から毎月送っていただく資料の中に『死生観』に関するレポートがあり、『終活』について語るときの大きなキーワードを示されたように強く感じました。

日本における「姥捨て山伝説」についての記述は、古くは“口減らし”による行為として発生したことのようですが、現代社会での“老人ホーム”を重ねて想像すると恐ろしいものを感じます。

もしも、「姥捨て山伝説」が真実であったとしたら、その時代における一つの「死生観」として受け入れていたと言うことなのだろうか。

ヒマラヤ山脈の見える山岳地帯では、年老いて働けなくなったり、不治の病を患っている老親を山の尾根まで背負って行き、そこに置いて帰るという風習が、かつて行われていたと言うことでしたが、食料や厳しい自然環境の下で生きてきた高齢者の覚悟として受け入れられていたのだろうか。

日本の「姥捨て山伝説」を思い起こしてみた。話は具体的で“難題解決”と“枝折り目印”によって親子の絆の強さを感じさせるもので、その時代の「死生観」を感じさせられる。

“難題”の話しは、年老いて働けなくなった老人を不要者として山中に遺棄せよとの殿様のお触れに対し、密かに家の床下に匿っていたところ、隣国からの難題が解けなければ国が攻め滅ぼされる局面で、匿っていた老親の知恵でそれを解決することができた。それによって攻めてきた隣国を退散させることが出来たとのこと。老人の知恵が国を救ったとして、以降は老人を大切にするようにお触れが回ったとのことだった。

“枝折り目印”の話は、老親を背負って山に捨てに行く途中で、背負われていた老親が子供が道に迷わず無事に下山できるようにと小枝を折って目印としていたという逸話だ。子供を思う親心の深さの大切なことに気づき、息子は老親を背負ったまま家に連れ帰ることにしたという。この時代の老親は“死への覚悟”が出来ていたということだったのか？

これらと同じような話は、東欧や、アフリカ、中国などでも語り継がれているそうだが、世界的に「長寿社会」になっている現代において、これをどのように捉えるかが課題であると思う。

● 「死生観」は、住環境、宗教によって異なる？

世界には厳しい住環境の中で生活している人々が沢山存在しています。

人々は恵み豊かな自然に感謝して生活していても、時には自然の脅威（大雨、暴風、津波、火山爆発、地震、乾燥など）に因って死の危険にさらされ、家族、親族、同胞を一気に失うことも希なことではありません。が、その人達は、その自然環境の中に住み続けます。

自然の脅威に対して忍耐強くそれを受け入れて生きて行くには、温暖で緩やかな環境の中で生活している我々とは、『死生観』が大きく異なっていることだけは私にも感じられます。

宗教のことは深く理解していなくても、神道や仏教を背景に「無常観」を美意識としてきた日本人の『死生観』は、グローバル化によって多くの宗教観が混在していることで大きく変わりつつあるように感じます。

命あるすべての人が必ず行き着く死の瞬間。その瞬間までをどのように過ごし、どのように迎えるかが『終活』なのですから、どうせなら自分なりの『死生観』を明確にして納得できる生活を送りたいものです。

『終活準備ノート』のプレゼント

カウンセリング・サロン『たまゆら』で企画いたしました【茶話会】第１回－“エンディング・ノートの楽しい書き方”のスタートを記念して［終活準備ノート・チェック編］または［終活準備ノート］を差し上げます。ご希望の方は、メール又は電話にてお申し込み下さい。

A・終活準備ノート チェック編

B・終活準備ノート

平成25年8月発行：日本終活カウンセラー協会編

ご利用ください！『経営危機から家族を守る！』のしおり

このキーワードは、リスク・カウンセラーが小規模経営者に向けて訴え続けている永遠のテーマです。

①正しく“家訓を守り”承継できる会社経営をめざす経営者
②急成長したのに資金繰りに行き詰まり再生に挑む経営者
③長引く経営不振に決断が先送りになり迷走している経営者
④不慮の事故により経営が危機的状態となった経営者の家族
⑤企業再生が失敗に終わり“起死回生”に向けて頑張る経営者

“万が一”の経営危機を回避するには日頃からの備えが必要です。

※問題が起きる前に社内勉強会にお役立てください。
※出張による少人数制ミニセミナーをお受けしています。

◇発行者　株式会社 ホロニックス総研
◇責任者　代表取締役・リスクカウンセラー　細野孟士
◇連絡先　〒113-0033 東京都文京区本郷１-３５-１２
TEL.03-5684-0021　FAX.03-5684-0031
http://www.holonics.gr.jp

【ホロニック】
（英：Ｈｏｌｏｎｉｃ）全体（ホロス）と個（オン）の合成語。
すなわち組織と個人が有機的に結びつき全体も個人も生かすような形態を言う。生物は個々の組織が自主的に活動すると同時に独自の機能を発揮する一方でそうした個が調和して全体を構成する　（小学館「カタカナ語の事典」より）